CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Hiroshima University Institutional Repository

猫と文学 ― その弐（英詩篇）[1]

松本　舞

序　ティボルトと猫の王 ― 猫の命、女の命

ウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）の戯曲『ロミオとジュリエット』（*Romeo and Juliet*）の中で、ロミオの友人マキューシオは、敵方の青年ティボルトのことを「猫の王」と呼び、決闘シーンにおいて次のように叫んでいる。

MERCUTIO
Tybalt, you ratcatcher, will you walk?
TYBALT
What wouldst thou have with me?
MERCUTIO
Good King of Cats, nothing but one of your
nine lives, that I mean to make bold withal, and, as
you shall use me hereafter, dry-beat the rest of the
eight. Will you pluck your sword out of his pilcher
by the ears? Make haste, lest mine be about your ears
ere it be out.
TYBALT
I am for you. [*Draws.*]

(William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, 3.1. 74-79)

---

[1] 本論は、広島大学・徳島大学・山口大学主催の次世代研究者育成プログラム「未来を拓く地方協奏プラットフォーム」のラボ・ローテーションの一環として、コンソーシアム活動経費にて島根大学にて訪問研究を行った（平成 28 年 10 月から平成 29 年 3 月）成果の一部である。また、本論は、「本の学校」今井ブックセンターで開催された、第 15 回「文藝学校」講演会における筆者の「あなたの知らない猫の世界 ―猫と英文学、猫とヒトの時空間」と題された講演（平成 29 年 7 月）及び、福岡県北九州市のラジオ局 FMKITAQ で筆者がパーソナリティを務めた「ネコと文学、ときどき音楽」（平成 29 年 6-8 月、全 13 回）の番組の一部である。本論中の下線はすべて筆者による。

マキューシオ
　ティボルト、ネズミ捕りめ、やる気があるのか？
ティボルト
　俺をどうしようというのだ？
マキューシオ
　猫のよい王よ、お前の九つの命のうちの
　一つをいただくだけだ。ただ今後のお前の態度で
　残りの八つも打ち負かすことになるぞ。剣の柄をつかんで
　鞘から華々しく抜かないか？早くしないと俺の剣が
　お前の耳をそぎ落としてしまうぞ。
ティボルト
　相手になろう。

マキューシオは、昔話に登場する「ティベルト」(Tybert) という「猫の王」('Prince of Cats', William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, 2. 4. 19) のエピソードに言及した後に、からかい半分でティボルトに闘いを挑む。ここでマキューシオは「九つの命があるのなら、そのうち立った一つだけ頂戴する」といっている。これは、「猫に九生あり、女に九猫の生あり」('A cat has nine lives and a woman has nine cats' lives') という諺に示されるように、猫は九回生きる、もしくは九つの命があると考えられていた。[2] マキューシオはこの諺に便乗して、ティボルトの命の一部を拝借しようというのである。ここでのマキューシオのセリフは、猫の生命力を賞賛するというよりもむしろ悪魔的な猫の再生能力に焦点が当てられたものになっていると考えることができるだろう。

---

[2] 一説では、この言葉は、17 世紀英国の歴史家、トマス・フラー (Thomas Fuller, 1608-1668) に拠るものだと言われている。オールドフィールド・ハウイ (W. Oldfield Howey) は三一体の三倍の数が「九」であることや、また猫が神とみなされたエジプトにおいて、すべての神が「九柱」単位で数えられたことなどにより、猫の命が「九つ」あると考えられるようになったと指摘している。W. Oldfield Howey, pp. 235-238 参照。また、この諺は現代のイギリスでも多く用いられており、猫の九つの命をいう表現を下敷きにしたキャッチコピーなどが多く見られる。例えば、ケネス・リリングトン (Kenneth Lillington) 篇の猫の詩集が『ナイン　ライブズ』(*Nine Lives: An Anthology of Poetry and Prose Concerning Cats*) と題してあったり、ジェイムズ・ボウウェン (James Bowen) 作『ボブという名のストリートキャット』(*A Street Cat Named BOB*) を原作とする映画のキャッチコピーが 'Sometimes it takes nine lives to save one' と表記されていることなどからも、この諺が現代の英国にも深く根付いていることがわかる。

前号掲載の拙論「猫と文学　その壱（ヨーロッパ篇）」で確認したように、シェイクスピアの作品の中では、『マクベス』の魔女が黒猫と同一視されていたことなどからも見て取れるように、猫は魔界に存在するものとして表象されていた。[3]　猫という存在は、古代エジプトにおいては神として崇められ、ローマ教皇のキリスト教布教政策の下では異教の神、更には、悪魔として虐待されてきた。しかしながら、ジェレミ・ベンサム（Jeremy Bentham, 1748-1832）が動物の苦しみを主張して以降、作家や画家の活動の助けもあって、動物や自然も芸術の対象へと高められていく。[4]

本論では、18 世紀以降のイギリスで発表された文学作品における猫の表象をみていくことにしたい。その際に、トマス・グレイ（Thomas Gray, 1716-1771）及びウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）が描く、獲物を捕らえる猫の仕草などに隠された、堕落と救済を確認する。そして、T・S・エリオット（T. S. Eliot, 1888-1965）、ポール・ギャリコ（Paul Gallico, 1895-1976）といった、現代の詩人たちによる猫の描写を確認し、その変遷を辿っていくことにしたい。

I.　猫、はぶられる
―　トマス・グレイのセリーマ、虚栄の先の末路

トマス・グレイ（Thomas Gray, 1716-1771）の作品に「金魚鉢で溺れた愛猫の死を悼む歌」（‘Ode on the Death of a Favourite Cat Drowned in a Tub of Goldfishes’）という詩が

---

[3] 『マクベス』における魔女とその手先については、前号に掲載の拙論 7-12 頁を参照。

[4] エドワード・リア（Edward Lear, 1812-1888）は動物園の鳥類や動物などを観察し、画家として活動していた。さらに、動物の絵に詩をつける形で、ナンセンス詩として、猫の物語も書いた。これは絵本を始めとする児童文学の書物の出版の先駆けにもなったと考えられるだろう。リアの「フクロウとねこさん」（‘The Owl and the Pussy-cat’）と題されたナンセンス詩の中では、フクロウと猫がボートに乗って旅をする様子が描かれており、現在でもメロディがつけられ、親しまれている。

fig. 1.　Edward Lear, ‘The Owl and the Pussy-cat’ の挿絵

ある。この詩は、グレイの友人であった、ホレス・ウォルポール（Horace Walpole）が飼っていた猫のセリーマの顛末を描いたものである。[5]　「哀愁に満ちた猫のセリーマ」が「壺のふち」にもたれ、「眼下の湖をじっと見つめて」いる様子からこの詩は始まる。

> ’Twas on a lofty vase’s side,
> Where China’s gayest art had dyed
> The azure flowers that blow;
> Demurest of the tabby kind,
> The pensive Selima, reclined,
> Gazed on the lake below.
>
> (Thomas Gray, ‘Ode on the Death of a Favourite Cat’, ll. 1-6)

> 哀愁に満ちた猫のセリーマ、
> ぶち猫族一番のおしとやか、
> 眼下の湖をじっと見つめて、
> もたれているのは、壺のふち。
> 支那の巧みの魅力的な技で、
> 藍色に咲いた花々を染め付けた
> 壺の、そびえたつ山腹の上。

グレイはセリーマのことを「ぶち族で一番のおしとやか」（‘Demurest of the tabby kind’）な猫として描いている。[6] この猫は「玉のような黒いお耳」（‘Her ears of jet’, l. 11）や「鼈甲と優劣競う、つやつやした毛並み」（‘Her coat, that with the tortoise vies’, l. 10）をもっているところから、三毛猫であると考えられてきた。‘tabby’ は伝統的に体に斑点がある猫のことを表すが、グレイは、三毛猫の模様も広い意味で斑点の一種として捉えているようである。三毛猫セリーマは、希少価値がある貴重な猫である。[7]　それと同時に、身体に斑点が現れるという形で、罪を背負っていることも併せて暗示されている。猫の模様を考慮す

---

[5] ウォルポールは後にストロベリー・ヒルの家で、セリーマがおぼれ死んだ壺を台座に乗せて展示した。

[6] ‘demure’ は *OED* 3. ‘Affectedly or constrainedly grave or decorous; serious, reserved, or coy in a way that is not natural to the person or to one of his years or condition’ の意でとった。グレイのここでの表現が用例として挙げられている。　この語はセリーマが恥じらいを持つような乙女と重ねられることを表している。

[7] 前号掲載の拙論の中でも触れたのだが、小泉八雲が、三毛猫の玉を「我が家に貴重な、頂戴に値する贈り物として届けられた」といっている。「鼠だけでなく魔物を追い払う力があると信じられた三毛猫」は縁起のいい猫として捉えられていたようである。小泉八雲 314-315 頁、前号掲載の拙論 1-2 頁を参照。

ると、グレイは三毛猫の模様に装飾的な希少価値と、罪という両義性を持たせているのではないだろうか。

セリーマは、自身の「ベルベットのような足」(‘The velvet of her paws’, l. 9)、「エメラルド色のおめめ」(‘emerald eyes’, l. 11) など、水面に映る自分をみて、自身にうっとりとし、「喜んでしっぽをたて」(‘Her conscious tail her joy declared’, l. 7) 「自分を見つめて、自画自賛で喉をゴロゴロ」(‘She saw; and purred applause’, l. 12) させている。[8] そしてセリーマは金魚鉢の中の金魚を見つける。その姿は、「二つの天使の御姿」(‘Two angel forms’, l. 14) もしくは 「水の守り神」(‘The genii of the stream’, l. 15) と表現されるのだが、セリーマの眼には、「鱗の鎧の古代テュロスの色が/ 最高に豪華な紫色の衣に透けて、/ 黄金色に輝いて見えた」(‘Their scaly armour’s Tyrian hue/ Through richest purple to the view/ Betrayed a golden gleam’, ll. 16-18)。そしてついに、セリーマは次のような行為にでてしまう。

> The hapless Nymph with wonder saw;
> A whisker first and then a claw,
> With many an ardent wish,
> She stretched in vain to reach the prize.
> What female heart can gold despise?
> What cat’s averse to Fish?
>
> (Thomas Gray, ‘Ode on the Death of a Favourite Cat’, ll. 19-24)

> あわれなことになる美猫なるニンフは驚嘆のまなざし。
> 最初はおひげ、次はかぎつめを、
> 何度も一心に願いつつ、
> 獲物に届けと伸ばしたけれど駄目だった。
> 黄金の嫌いな女性の心なんてありえない。
> 魚の嫌いな猫なんてありえない。

ここでセリーマは一種の「ニンフ」(‘Nymph’) として描かれているが、金魚という獲物めがけて、「おひげ」を、そして「かぎつめ」を伸ばしてしまう。金魚は一種の黄金に喩えられ、その黄金に眼がくらむセリーマは「あつかましいお嬢さん！」(‘Presumptuous maid!’, l. 25) とも表現される。ここでは、黄金に眼がくらむ女性の虚栄、さらには、魚に眼がくらむ猫の様子が一種の寓意として示されている。

そうして、見せかけの黄金に心を奪われてしまったセリーマは、「悪意に満ちた運命が、

---

[8] 尻尾による信号 (‘tail signals’) については、Morris, pp. 30-32 を参照。また、猫のゴロゴロ音については Morris, pp. 14-17 を参照。

傍らに座って、ほくそ笑んでいるのも知らないで」(‘Malignant Fate sat by, and smiled’, l. 28)　金魚鉢の中で溺れてしまう。

> Eight times emerging from the flood
> She mewed to every watery god,
> Some speedy aid to send.
> No dolphin came, no Nereid stirred[.]
>
> (Thomas Gray, ‘Ode on the Death of a Favourite Cat’, ll. 31-34)

> 命の八回分、大水から顔を上げ、
> 彼女は、みゃあ、と祈ったよ、ありとあらゆる水神さまに、
> 早く助けを遣してくださいませ、と。
> でも、イルカも来ないし、水の妖精も現れない。

ここでは、セリーマが祈る様子が「みゃあと祈る」(‘mewed’) とある意味でコミカルに表現されている。ここでグレイが「八回」水から顔を上げてセリーマが助けを求めている様子を描いているのは、序で見たように、猫には九つの命がある、と考えられていたことに由来するのだろう。九つあるうちの八回は助けを求め、必死に祈った甲斐もなく、何の助けも現れない。そして、屋敷の中の誰もセリーマを助けに来てはくれない。グレイは次のように続けている。

> Nor cruel Tom, nor Susan heard;
> A Favourite has no friend!
>
> (Thomas Gray, ‘Ode on the Death of a Favourite Cat’, ll. 35-36)

> 薄情な猫仲間のトムもスーザンも聞きつけてはくれない。
> 贔屓されてる猫には友達はいないもの！

ここでの「トム」や「スーザン」は、トムという名が雄猫によくつけられる名であることを考慮すると、これらの名は、人間の名ではなく、同じ屋敷で飼われている、猫仲間のことではないだろうか。[9]　「愛猫」(‘a Favourite Cat’) とも表現されるセリーマは、日ごろの待遇の差の恨みをかっているためか、溺れてしまうような事態になっても、他の猫たち

---

[9]　トムという名は現代でも雄猫に多くつけられ、例えば、テッド・ヒューズ　(Ted Hughes,1930-1998) は ‘Esther’s Tomcat’ と題した詩を書いている。トムという名が伝統的に雄猫に付けられることについては、Gettings, pp. 39-40 を参照。

の助けを得ることはできない。

そしてこの詩の最終連で、グレイは「このことから、美しいご令嬢の皆々様、だまされないで」('From hence, ye beauties, undeceived', l. 37)、「過てる一歩は決して取り返しがつかないことを。/ そして、大胆であっても、用心深くあれ、ということを。」('Know, one false step is ne'er retrieved, / And be with caution bold.', ll. 38-39) と助言している。セリーマが気を取られてしまった金魚は「惹きつけるもの」('that tempts', l. 40) であったが、それは「正当な獲物」('lawful prize', l. 41) ではなく、運命の女神の仕業であったとグレイは忠告する。そして「輝くものこれすべて黄金ではない」('Nor all that glisters, gold', l. 42) という句でこの詩は終結する。

虚栄にまみれた女性を美猫に喩えたグレイの表現は、一種の教訓詩として読むこともできるが、この詩では、喜びからしっぽをたてたり、自画自賛をして機嫌よくゴロゴロと喉をならしたり、という猫の仕草の細部が描かれている。九回生きるはずの美猫セリーマの八回分の願いも虚しく、飼猫のトムなどに、その叫び声が届かない、というように、人間に贔屓されている美猫には助けが来ない、という顛末も滑稽に描かれている。三毛猫という、一種のぶちねこに、希少な装飾と同時に罪を暗示しながら、猫の生態を詳細に描いたグレイの描写の中には、女性の虚栄に対する戒めと同時に、猫を詳細に観察している詩人の姿が併せて描かれているのである。この詩の中の猫の描写の中には、キリスト教の布教の政策以来虐待をされていた猫が、寓意にとどまらず、愛すべき存在として認識され始めたという概念の変化を見ることができるだろう。

II. 猫、葉っぱと舞う
― ウィリアム・ワーズワスの仔猫

そして、19 世紀に入ると、ロマン派の詩人、ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) によって、仔猫の無邪気さが賛美されることとなる。

ワーズワスは 1804 年に発表した「仔猫ちゃんと落ち葉」("The Kitten and the Falling Leaves') と題した詩の中で、自身の子どもを抱きかかえて、次のように言っている。

THAT way look, my Infant, lo!
What a pretty baby-show!
See the kitten on the wall,
Sporting with the leaves that fall,
Withered leaves---one---two---and three---
From the lofty elder-tree!

(William Wordsworth, 'The Kitten and the Falling Leaves', ll. 1-6)

あちらをごらん！私の赤ちゃん

なんてかわいらしい、赤ん坊の見世物なんでしょう！
塀の上にいる仔猫ちゃんをごらん
落ちてくる葉っぱと戯れて、
枯れた葉っぱが、一枚、二枚、そして三枚、と落ちてくる
あの背の高いニワトコの木から！

塀の上で猫が葉っぱと戯れる様子は「赤ん坊の見世物」として、かわいらしい様子で描かれている。中世以降、猫が悪魔と同一視されていたことを考えると、この猫の描写は、それまでの伝統的な猫の描写とは全く異なるものと考えられる。ワーズワスは、「輝いて美しい今日の朝の/ 静かで凍て付いた空気の中を/ ぐるぐる、ぐるぐる渦を巻きながら枯れ葉は落ち」(‘Through the calm and frosty air/ Of this morning bright and fair,/ Eddying round and round they sink/ Softly, slowly’, ll. 7-10)、目の前の仔猫が、落ちてくる葉っぱと次のように格闘するという。

[. . .] the Kitten, how she starts,
Crouches, stretches, paws, and darts!
First at one, and then its fellow
Just as light and just as yellow[.]
(William Wordsworth, ‘The Kitten and the Falling Leaves’, ll. 17-20)

・・・仔猫の様子はといえば、驚いて飛びのき、
かがみ込んで準備し、体を伸ばして、猫パンチする。それから
最初は一枚目に向かって、それから同じように軽やかで、
同じように黄色い二枚目の葉っぱに向かって、突進だ！

‘crouch’, ‘stretch’, ‘paw’, ‘dart’ というそれぞれの表現は、猫の習性を詳細に捉えたものとなっている。これらは、仔猫の仕草でありながら、まるで、野生の虎のような躍動感をも伴う。そして、獲物を追いかける仔猫は、次のように獲物へと突進していく。

With a tiger-leap half way
Now she meets the coming prey,
Lets it go as fast, and then
Has it in her power again[.]
(William Wordsworth, ‘The Kitten and the Falling Leaves’, ll. 17-28)

ほら、彼女は、虎のような跳躍で

落ちてくる途中の獲物を捕まえる。
捕まえたのと同じくらい早く獲物を離したかと思うと
次にはそいつをまたもや手中に捕まえる。

仔猫は「虎のような跳躍」を見せ、獲物を手に入れ、また離し、またその獲物を手の中におさめる。獲物を求める仔猫の情熱は、「仔猫が燃えるような眼差しで見上げる時の / 獲物を求める願いの激しさたるや！」(‘What intenseness of desire/ In her upward eye of fire!’, ll. 23-24) とも表されるが、注目すべきは、ここでの仔猫の「獲物」(‘prey’) は、先に見たグレイの詩の三毛猫セリーマの獲物とは本質的に異なる点である。ワーズワスは、あえて、仔猫を肉食獣である「虎」に喩えているが、仔猫が追い求めるのは、「小さな葉っぱ」という植物である。この葉っぱは、以下のように、「妖精が乗っているかもしれない」と想像させるようなものとして表現されている。

[. . .] one might think.
From the motions that are made,
Every little leaf conveyed
Sylph or Faery hither tending,
To this lower world descending.
Each invisible and mute,
In his wavering parachute.
(William Wordsworth, ‘The Kitten and the Falling Leaves’, ll. 10-16)

その動きを見ていると、
こんなふうに想像する人がいるのかも——
一枚一枚の小さな葉っぱには、
空気の精か妖精かが乗っていて、こちらに向かって、
彼の揺れるパラシュートで、
目には見えず、物言わず、
この下界へと下降しているのだ、と。

落葉は、伝統的には、夏に生い茂るような若々しい青葉から、やがて衰弱へと向かってゆく枯葉として、老いの象徴として、描かれることが多かった。[10] しかしながら、ワーズワ

[10] 16、17 世紀の自然観では、人間の下位に人間以外の被造物が存在するという考え方が支配的な時代であった。詩や絵画においても自然描写は、中心になりえなかったし、自然の事物が比喩表現として使われる際も、あくまで人や事物が主旨 (tenor) となった。例えば、

スの枯葉は、詩人自身の老いを想起させながらも妖精が宿るパラシュートのような愛らしいものとして描かれており、更には、猫の躍動感を引き出すものとしても描写されている。敷衍すれば、ワーズワスが描き出す仔猫は、小動物という獲物を捕らえる肉食動物としては描かれておらず、アダムが原罪を犯した後に誕生する殺生という罪を仔猫は背負わないかのようである。[11]　この獲物に対する仔猫の純粋無垢な様子は、さらに次のように描写される。

Now she works with three or four,
Like an Indian conjurer;
Quick as he in feats of art,
Far beyond in joy of heart.
Were her antics played in the eye
Of a thousand standers-by,
Clapping hands with shout and stare,
What would little Tabby care
For the plaudits of the crowd?
Over happy to be proud,
Over wealthy in the treasure
Of her own exceeding pleasure!

(William Wordsworth, 'The Kitten and the Falling Leaves', ll. 29-40)

植物とりわけ花は人間の人生の短さを描く際に用いられた。例えば、ロバート・ヘリック(Robert Herrick, 1591-1674) は「水仙」('Daffodils') の花の生命の短さに乙女の人生の春の短さを重ね、シェイクスピアはソネット 18 番、73 番などの中で、人生の夏や秋を移りゆく季節に投影している。また、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-1674) は叙事詩『失楽園』(*Paradise Lost*) の中で、アダムが罪を犯した時、自然の中に「毒気や靄、熱い蒸気」('Vapour, and Mist, and Exhalation hot', John Milton, *Paradise Lost*, Book X, l. 694) が生じ、自然の中に毒が入り込み、被造物は病んだ状態になったことを描いている。17 世紀以前の英国においては、自然は、人間の原罪をともに罪背負う存在として描かれ、そして人間は、その堕落した自然を制御する立場にあった。17 世紀後半に入ると、神秘主義思想家たちが唱えた自然観が詩人たちにも取り込まれることとなる。マクロコスモスとミクロコスモスの概念や自然観の変遷については、拙書『ヘンリー・ヴォーンと賢者の石』第 5 章、またワーズワスを中心としたロマン派の詩人たちが描く自然については、吉中『花を見つめる詩人たち』174-272 頁を参照。

[11] 原罪と猫との関係については、前号に掲載の拙論 3-4 頁を参照。

今や彼女は3枚目、4枚目の葉っぱを扱い
インド人の曲芸師がお手玉をしているよう。
見事な技においては彼と同じくらい早いけれど
心の喜びにおいてははるかに彼を超えている。
仔猫の、この道化芝居が、目を見張り
拍手喝采する、たくさんの見物人の前で
演じられたとしても、
群集の賞賛に対して、ちいさなぶち猫は、
何もかまいはしないだろ。
すごいだろ、と胸を張るよりももっと幸せで、
彼女自身の、一心不乱の喜びという
宝物で、あまりに満ち足りているから！

仔猫は、この世的な褒美である「拍手喝采」のような賞賛を求めておらず、獲物としての葉っぱを追い求めるだけで、「一心不乱の喜びという/ 宝物」が得られるのだ、とワーズワスは主張する。この喜びには、グレイが三毛猫セリーマの中に込めたような、女性が陥りやすい虚栄の要素は全く見られない。むしろ、褒美や対価をものともしない、幼児が持ちうる宝である、純真を見ることができる。

この詩の中で、仔猫の躍動感と、娘のかわいらしさを交互に描き、彼らを重ねあわせたワーズワスは、「憂いにもかかわらず、悲しみにもかかわらず、/ 落ちていく人生の葉っぱとじゃれあう能力を持ちたい。」（‘Spite of care, and spite of grief,/ To gambol with Life's falling Leaf’, ll. 127-128）という句でこの詩を閉じた。詩人は、「仔猫の一心不乱ぶりの仲間になって」「手当たり次第、どんな玩具にも喜んで、/ 笑っている赤ん坊の目」に、「仔猫の忙しいくらいの喜びを重ね」（‘Pleased by any random toy;/ By a kitten's busy joy,/ Or an infant's laughing eye/ Sharing in the ecstasy’, ll. 117-120）ている。

人間が世界の中心の存在であり、その下位に存在すると考えられていた被造物、そして被造物の一つである猫という動物を、ワーズワスは躍動的な描写を用いて表現した。葉っぱという獲物を追いかける仔猫の情熱は、純粋無垢なものの喜びとして示されている。グレイの詩の中の三毛猫セリーマが、金魚という光り輝く獲物を捕らえようとして溺れ、罪から逃れられない存在として描写されている一方で、ワーズワスが描く仔猫は、人間の子どもが持ちうる純粋無垢さと同じ性質を持つ存在として表現される。ワーズワスは、被造物と同様に罪を背負う存在として、長い間賛美の対象になりえなかった子どもを、罪を持たない純粋無垢な存在として表現した詩人であるが、仔猫という存在もまた、この同じ詩人によって罪を背負わない存在として描き出されたのである。こうして、罪を背負わされた猫が、詩作品を始めとする芸術の対象として高められていった。

III.　猫、瞑想する
―　T・S・エリオットの『キャッツ』と猫の名前

そして 20 世紀に入ると、T・S・エリオット（T. S. Eliot, 1888-1965）が、猫という存在を、哲学者のように、瞑想する動物として描くこととなった。エリオットの言葉を借りれば、猫には三つの名前があって、猫たちは、人間には想像できないような、猫だけが神に与えられた名を考えているからである、と、エリオットは次のように説明している。

When you notice a cat in profound meditation,
　The reason, I tell you, is always the same:
His mind is engaged in a rapt contemplation
　Of the thought, of the thought, of the thought of his name:
　　His ineffable effable
　　Effanineffable
Deep and inscrutable singular Name.

（T. S. Eliot, 'The Naming of Cats', ll. 25-31）

ほら、よく猫って物思いにふけっている。
　その理由はいつも同じ。
猫は自分の名前について、うっとり瞑想に浸っている、
　考えに考えて、考えに考えぬいて
　いわく言い難い、言えそうで言えない。
深遠で謎めいた、たった一つの名前を。

エリオット流に言えば、猫は瞑想にふける哲学者であり、神と通じる能力を持っているのである。

この詩は、「ネコに名前をつける」ということは骨折り仕事で、休日の片手できない、と不平をいう、次のような句から始まる。[12]

12　エリオットの詩集『ポッサムおじさんの猫のマニュアル』（'*Old Possum's Book of Practical Cats*）に出てくる猫はいろいろな変わった名前をもっている。例えば、「ギャンビー・キャット」（The Old Gumbie Cat）という猫がでてくるのだが、本来は「ジェニーエニ―ドッツ」（'Jennyanydots'）という名がつけられている。'Jenny' という女の子の名前に、「いくらでも」という意の 'any'，そして「斑点」の意の'dots' の合成語になっており、その猫が「座って、座って、てこでも動かないために、ねばねばしていて、なかなかくっつ

The Naming of Cats is a difficult matter,
　It isn't just one of your holiday games;
You may think at first I'm as mad as a hatter
　When I tell you, a cat must have THREE DIFFERENT NAMES.

(T. S. Eliot, 'The Naming of Cats', ll. 1-4)

猫に名前を付けるのは、まったくもって難しい。
　休日の仕事の片手間じゃ、まったく手に負えない。
気でもくるったか、という人もいるけれど、
　いいかい、猫には三つの名前がどうしても必要なのだ。

エリオットがいう、猫に必要な三つの名の内の一つは、「家族が使う名前 / 例えば、ピーター、オウガスタス、ジェイムズ」といった名前である。[13]　「もっと洒落たの」('There are fancier names if you think they sound sweeter', l. 9) もあり、「プラトー、エレクト、ディメーター」('Plato, Admetus, Electra, Demeter', l. 11) など、ギリシャ神話にも登場するよ

いたら離れない、gum に、すなわちギャンビー・キャットになった」('She sits and sits and sits and sits- and that's what makes a Gumbie Cat!') といっている。

[13] このエリオットの表現は、村上春樹が「猫に名前をつけるのは」と題したエッセイの中で次のように焼き替えている。

「猫に名前をつけるのはむずかしいことです」という T・S・エリオットの有名な詩があるけれど、知っていますか。
「それはただの暇つぶしではありません」と続く。その詩の中でエリオットさんは、猫は三つの名前をもたなくてはならないと主張する。ひとつは普段呼ばれる簡単な名前。「たま」とかね。もうひとつは、日常は使わないけれど、猫たるものはひとつ持つべき、よそ行きの気取った名前。たとえば、えーと、「黒真珠」とか、「わすれな草」とか。そしてもうひとつは、その猫自身しか知らない秘密の名前。それは決してよそに漏らされることはない。
　詩人というのは、いろんなややこしいことを考えるものだな、とつくずく感心してしまう。でもたしかに、そこまで深く突き詰めて考えると、猫に名前をつけるのはほどんど一大事になってしまう。
　僕はこれまでけっこうたくさんの猫を買ったけれど、猫に名前を付けるのに時間をかけたことはない。頭にぽっと浮かんだ言葉をそのまま名前にしてしまう。そのときビールを飲んでいれば「きりん」とつける・・・

（村上春樹「猫に名前をつけるのは」角田光代編『猫なんて』　18 頁）

うな名はここに属する。

「でもネコ様にはもう一つ、別格の名前」(‘But I tell you, a cat needs a name that’s particular, / A name that’s peculiar, and more dignified.’ , ll. 13-14) が必要、と続く。「変わっていて、威厳がある呼び名」「髭を左右に張りつめて、誇りを保っていられる名前」(‘Else how can he keep up his tail perpendicular, / Or spread out his whiskers, or cherish his pride?’, ll.15-16) とさえいう。これは、「マンカンストラップ、クワックソウ、／ジェリローラム」(‘Munkanstrap, Quaxo or Coricopat/ Such as Bombalurina, or else Jellylorum[14]’, ll.18-19) などである。これらは「特別な猫にしか通用しない呼び名」(‘Names that never belong to more than one cat’, l. 20) でもある。ここでは、猫には威厳があり、人間がその尊厳を尊重されるように、猫たちにも誇りがあるのだ、とエリオットは論じる。さらに、猫たちは、「言い難い、言えそうでもいえない、深遠で謎めいた、たった一つの名前はないものか」と考えている、という。こうして、猫たちには三つの名が与えられ、一般的な呼び名や誇りを保持する名に加え、神と通じる名というものを持ち合わせるのだ、とエリオットは描写している。哲学者のような猫が瞑想する名は、決して人間が知り得ることはなく、猫はもはや人間よりも神に近い存在として、その地位を獲得した、と捉えることもできる。

また、エリオットの詩集『ポッサムおじさんの猫のマニュアル』(‘*Old Possum’s Book of Practical Cats*) は、ロイド・ウェーバー (Lloyd Webber) によって、ミュージカル『キャッツ』(CATS) として上演され、その中で、娼婦猫グリザベラの聖人化が描かれている。ウェーバーはエリオットの詩をほとんど変えることなく、このミュージカルを作成したが、娼婦猫グリザベラが最終的に猫たちの中から選ばれて聖人になって昇天する、というプロットは、この詩集には収録されていない。ウェーバーは、未発表のエリオットの詩にインスピレーションを受け、新たにグリザベラのエピソードを加えた。落ちぶれた娼婦猫が昇天する描写は、マグダラのマリヤの描写を想起させ、アポテオーシス (apotheosis) の概念に基付いて作成されている、と考えることもできるだろう。ウェーバーによる変更は、娼婦や魔女としておとしめられていた猫を聖人として高めたと考えることができる。

IV.　猫、世界を乗っ取る
―　ポール・ギャリコと猫の椅子

エリオットによって、一種の哲学者として高められた猫は、今や、人間界を、精神的に

---

[14] Jelly は俗語で「かわいこちゃん」のこと。ロイド・ウェーバーはこの「ジェリー　ローラム」をミュージカル『キャッツ』の中で「ガス―劇場猫」でガスと掛け合いで高く澄み渡る声で歌う、かわいらしい猫として登場させている。

も、肉体的にも「乗っ取り」を行うようになった。例えば、ポール・ギャリコ（Paul Gallico, 1895-1976）は『猫語の教科書』（*The Silent Miaow*）の中で、語り手の猫が、ある一家をどうやって「乗っ取った」か、をコミカルに描いている。[15] ギャリコの「これはわたしの椅子よ」（'This is my chair'）と題された詩は、『猫語の教科書』の語り手と同じように、まずは「椅子」を乗っ取る様子が次のように描写されている。

This is my chair.
Go away and sit somewhere else.
This one is all my own.
It is the only thing in your house that I possess
And insist upon possessing.
Everything else therein in yours.

(Paul Gallico, 'This is My Chair', ll. 1-6)

これは、わたしの椅子よ。
向こうへ行って、どこかほかの所に座ってくださいな。
この椅子は、完全にわたしのもの。
あなたの家の中で、わたしが所有している、
そして所有にこだわる、唯一のものよ。
家の中のほかのすべてのものはあなたのもの。

語り手の猫は、人間に向かって、家の中のものすべては人間が所有していいので、自分に椅子だけは与えてくれ、と言っている。冷静に考えれば、人間が買ってきた椅子を無断で猫が「乗っ取って」いるのだが、語り手の猫は、さも当然かのように、「この椅子は、完全にわたしのもの」（'This one is all my own'）だと言い張り、更には、椅子だけは自分が「選んだ」のだと、次のように主張する。

This chair I selected for myself.
I like it,

---

15 ギャリコは主人公の猫に「人間全部に共通する特徴は、孤独ということ。そして猫とちがって、人は一人でそれに耐えられるだけの強さがないのです。猫が人間を支配できるのも、たぶん根底に、人は孤独の中で猫を必要とするという事実があるからでしょう。・・・私が、ひざに座ってあげたり、呼ばれたら応えてあげたり、ベッドの足のほうに寝てあげたり、あるいはただそこにいるというだけで、ときには彼らの孤独をなぐさめてあげられる・・・」と言わせている（Gallico, p. 121）。

It suits me.
You have the sofa,
The stuffed chair
And the footstool.
I don't go and sit on them do I?

(Paul Gallico, 'This is My Chair', ll. 1-6)

この椅子は、わたしが自分のために選んだの。
気に入ってるのよ、
わたしにぴったりなの。
あなたには、ソファや
綿を詰めた椅子や
足乗せ台があるじゃない。
それらの上には、わたし、座らないでしょ？

「選んだ」のは人間だろう、という反論をものともせず、人間には他に座る場所があって、語り手の猫は、椅子以外には座らないのだから、自分が選んだ椅子だけはよこせ、と言い張り続け、最終的に、椅子の乗っ取りを完了した猫は、次のように、人間に苦言まで呈する。

Then why cannot you leave me mine,
And let us have no further argument?

(Paul Gallico, 'This is My Chair', ll. 19-20)

だから、わたしにはわたしの椅子に座らせてくれない？
もうこれ以上、ぐちゃぐちゃ言わずに。

もはや、飼い主の命令を聞かないばかりか、語り手の猫は、もはや「議論」('argument') の余地はない、とさえ結論付ける。こうして、猫の乗っ取りが完了する。『猫語の教科書』のマニュアルにも描かれているように、人間の一部を、少しずつ、猫は乗っ取っていき、しまいには、「猫なんか大嫌いだ、家の中にはいれないぞ」と大声でわめく男主人をも「トロトロに溶けちゃ」うまで、陥落させてしまう。[16]　この乗っ取りを、作者のギャリコをはじめとして、作家たちは楽しんでいるようでもある。

[16] Gallico, pp. 15-26.

結

本論では、古くは悪魔として虐待され、また、長い間寓意として描かれてきた猫が、詩人たちによって、純粋無垢な存在として、復権させられ、哲学者や聖人として高められ、さらには人間界を「乗っ取る」様子を見てきた。[17]

前号の冒頭で見たように、いまや、ネズミ捕獲長のラリーが英国の首相官邸まで乗っ取り、首相が退陣しようが、新しい首相を迎えようが、人間の動向には応じない。移民を受け入れようが、EU を脱退しようが、のんびりと椅子の上に座って、人間という動物の動きを監視しているようだ。職務怠慢を理由に人間がラリーを「更迭」しようが、猫の世界には何の影響も及ぼさない。さらに言えば、人間がつくる境界線は、塀の上にあれば、猫たちにとっては、よい見張り台となり、県境も国境も、全く意味をなさない。

猫という動物は、歴史的に、そして文学的に紐解いていくと、さまざまな苦難を乗り越え、また、そのような試練をものともせずに、人間と関わってきた動物ともいえるだろう。彼らの存在は、利益を数値化し「役に立つ」もののみが価値があるという幻想に陥りがちの現代の人間たちに対して、物事を多角的に捉える必要があることの警鐘をさえ鳴らすだろう。猫とは、九つもの猫の命をもってして、再生し、形を変えながらも、たえず人間に寄り添いながら生き続けていく、唯一の存在なのかもしれない。

参考文献

Bentham, Jeremy. *An Essay on Jeremy Bentham*. Strossmere Books, 2010.

Boylan, Clare. *The Literary Companion to Cats*. Sinclair-Stevenson: London, 1994.

Carr, Samuel (ed.) *The Poetry of Cats* . London: Chabcellor, 1991.

Eliot, T. S. *Old Possum's Book of Practical Cats*. London: Faber and Faber, 1953.

Fragos, Emily. (ed.) *The Great Cat: Poems about Cats.* London: Everyman, 2005.

Gallico, Paul. *The Silent Miaow: Manual for Kittens, Strays and Homeless Cats*. Pan Books: London, 1987.

Gettings, Fred. *The Secret Lore of the Cat: The Magic of Cats- in Myth, Legend and Occult History*. London: Grafton Books, 1989.

17　現代の詩の中では、猫が古くから背負った悪魔の要素は排除されているように思われる。例えば、W・B・イエイツ（W. B. Yeats, 1865-1939）の「猫と月」(‘The Cat and the Moon’) に登場する黒猫ミナロウシュは、17 世紀以前までに考えられていたように、魔女の手先として罪を背負う存在である黒猫としてではなく、月と一緒にダンスを踊る猫として描かれている。黒猫の神秘性は、その瞳の変化と月の満ち欠けの呼応関係として示され、そこには堕落の象徴としての猫の姿はみられないようである。

Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan. Vol. 2.* Cosimo: New York, Tuttle: Vermont, 1964.

Howey, M. Oldfield. *The Cat: In the Mysteries of Magic and Religion*. Castle Books: New York, 1956.

Klingender F. *Animals in Art and Thought to the End of the Middle Ages*. Routledge: London, 1971.

Lillington, Kenneth *Nine Lives: An Anthology of Poetry and Prose Concerning Cats*. Jolly &Barber: London, 1977.

Morris, Desmond. *Catlore*. Crown: New York. 1988.

Scott, Walter. *Letters on Demonology and Witchcraft*. London, 1831.

Shakespeare, William. *Mr. VVilliam Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies Published According to the True Originall Copies*. London, 1623.

---. *The Riverside Shakespeare.* Ed. G. Blakermore Evans. Oxford: OUP, 1972.

Topsell, Edward. *The Historie of Foure-Footed Beastes Describing the True and Lively Figure of Every Beast.* London, 1607.

---. *The Historie of Serpents. Or, The Second Booke of Liuing Creatures Wherein is Contained Their Divine, Naturall, and Morall Descriptions*. London, 1608.

Webster, John. *The Selected Plays of John Webster*, John Dollimone and Alan Shieled. Cambridge: CUP, 1983.

浅田次郎、日本ペンクラブ編『猫のはなし―　恋猫うかれ猫はらみ猫』（角川文庫、2013年）

井伏鱒二、谷崎純一郎他クラフト・エヴィング商會『猫』（中央公論新社、2009 年）

河合隼雄『猫だましい』（新潮社、2000 年）

角田光代、萩原朔太郎、村上春樹他『猫なんて！―　作家と猫をめぐる 47 話』（キノブックス編集部、2016 年）

桐野作人編『猫の日本史』（洋泉社、2017 年）

倉阪鬼一郎『猫俳句パラダイス』（幻冬舎新書、2017 年）

小泉八雲『光は東方より』平川佑弘訳、講談社学術文庫、1999 年。

谷真介編『猫の伝説 116 話―家を出ていった猫は、なぜ二度と帰ってこないのだろうか？』（新泉社、2013 年）

谷崎潤一郎、寺田寅彦、大佛次郎他『猫は神さまの贈り物　エッセイ編』（実業之友社、2014年）

夏目漱石『吾輩は猫である』（新潮社、2013 年）

日本民話の会/ 外国民話研究会編訳『世界の猫の民話』（ちくま文庫、2017 年）

佛渕健悟・小暮正子編『猫の国語辞典』（三省堂、2016 年）

復本一郎校注『鬼貫句選・ごと』（岩波文庫、2010 年）
松本舞『ヘンリー・ヴォーンと賢者の石』（金星堂、2016 年）
松本舞「猫と文学 ―　その壱（ヨーロッパ篇）」『表現技術研究論集　13』（広島大学表現技術プロジェクトセンター、2018 年）
吉中孝志『名前で読み解く英文学』（広島大学出版会、2013 年）
吉中孝志『花をみつめる詩人たち―　マーヴェルの庭とワーズワスの庭』（研究社、2017 年）
和田博文編『猫の文学館 II―　この世界の境界を超える猫』（ちくま文庫、2017 年）
ポール・ギャリコ『猫語の教科書』（灰島かり訳、ちくま文庫、1998 年）

（まつもと　まい、広島大学大学院文学研究科助教）